



堀越英嗣 「八雲の家」 矢板建築設計研究所 (本誌1112)



キッチン回りでお話をする矢板久明さん、建主さん、堀越さん、矢板直子さん(左から順に)。収納棚、テーブル家具、キッチン家具はすべて矢板建築設計研究所によるデザイン。

「建築」としてのすまい

冬晴れの日差しが柔らかい朝、都心にほど近い住宅地のバス通りに面した一角にあるこの家の第一印象はとても爽やかだった。その理由は不思議な品格をもつ佇まいにある。周囲の街並みにスケールを合わせながら正面はメインの通りから少し引き、控えめな表情をつくり出している。ミニマルで質感のある出窓、階段、樹木のコンポジションがユーモラスなかたちをもつ壁面の余白に丁度よく配置されており、現代アートのような外観が街並みを引き締めている。都市においては、住宅は単独で存在できるのではなく、向こう3軒両隣と共存しなければならず、そこから逃げることはできない。特に今回のように角地に建つ場合は、なおさら街の景観に大きな意味と責任をもっている。その点において住宅は「建築」や「都市デザイン」であるともいえる。矢板さんたちはよい意味で、スケールの大きな建築も住宅も同じ目線で設計をされていると思う。それは

中に入った時に即座に感じる事ができた。人が住む器としてのきめ細かい配慮が随所であり、とても心地よく包まれる「すまい」であるが、紛れもなく「建築」としての品格が空間を引き締めている。普段着の気持ちよさと便利さをもちながらしっかりとした価値観を感じさせるようなセミフォーマルなデザインの服を着た時の感覚に包まれた。

優れたすまいにはほどよい緊張感と気持ちよさのバランスが大切だと思っている。見せるためだけ

としか思えないようなディテールやシャープすぎる形態の追求や概念優先の空間構成の実験とは一線を画す矢板さんたちは、クライアントが希望する明確な生活イメージに対し、徹底して共に考え、答えを共有するという優れたバランス感覚の持ち主であることが、内部をじっくり案内していただき、理解できた。収納や空間の使い方などの具体的な利用イメージを受けて、さり気なく美しいシーンが連続する「建築」としてすまいを実現している。

あえていえば、平面は普通である。昔から平面はクライアントのものであり、立面、断面は建築家のものであるといわれているが、まさに矢板さんはスタンダードな平面を受け入れながら、断面、ディテールの建築的追求により、豊かな空間に昇華させている。さまざまな経験に裏打ちされた緻密な検討用資料を拝見し、高いレベルの職能をもつ建築家が真剣に「優れた普通さ」に向き合う姿に心が和らぐと同時に嬉しく思えた。クライアントからの細かな収納等の希望を実現しつつ、美しい建築に導く姿勢は共感できる。光や風、景色の変化を感じる伸びやかな空間でクライアントの奥様とご長男が自然にそれぞれの居場所でさり気なく生活されている様子に接することで、人の動作、心理を踏まえた配置という基本の大切さを再確認した。再び外へ出た時、ふと心のこもったお茶会のあとのような充実感を覚え、帰路に着くことができた。

(ほりこし・ひでつぐ／建築家)

左：前面道路から見た外観。* / 中：屋根の開きを抑えるタイロッド回りの詳細図。原寸大で描かれている。 / 右：ダイニングからリビングを見る。ダイニング脇に子供用家具を設え、おもちゃや絵本を自分で選んで遊ぶ環境をつくっている。*

